



皆さんは知っていますか。68年前、終戦を目前に控えたあの日、この鬼北町に4発の爆弾が落とされていたことを――

一体、どれだけの方がこの史実を知っているでしょうか。絵空事ではない、実際に私たちの住むこの町で起こった出来事を、ぜひ知ってもらいたいです。

伝えたい、だから聞いてほしい

～二度と同じ過ちを繰り返さないために～

1945年8月15日、第二次世界大戦終戦――この鬼北町でも当時多くの人が戦争の犠牲となり、約680人が戦死したという記録が残されています。

当時、この小さな町にも確実に根付いていた「お国のために」という精神。戦地へと赴く人は、「お国のために命を懸ける英雄」として地域の人々から盛大に見送られました。そんな「死」を覚悟した人を見送る家族。笑顔で見送るその心には「どうか命を落とすことなく、元気で帰ってきてほしい」という願いを抱き、懸命に祈っていたそうです。

防空頭巾を被り、竹やりを手を持ち訓練する女性たち。元気な男性は全員戦地へと出征するため、家族を、地域を守るのは女性の力。「私たちが守らなければ」そんな思いが女性たちを駆り立てました。光が外に漏れないように電球の回りを黒く塗りつぶした電気。いつ来るか分からない空襲におびえながらの学校は勉強に集中できるはずありません。

そんな心身ともに追い込まれるような戦争を経験し

た人は言います。「戦争は命の取り合い。言葉を変えても殺し合いと一緒」。そして、「最近では簡単に人を傷つけたり、殺したりするニュースが目につく。私たちから見れば、それは小さな戦争にすぎない。1人1人が真剣に考えてほしい」と。戦争という常に命の局面に接してきた人たち。そんな人たちだからこそ感じる不安や危惧があるのでしょう。

あれから68年経った現在、戦争を経験した人たちが高齢となり、その記憶を語り継ぐ人が少なくなっています。そんな今だからこそ、実際にあの悲惨な戦争を経験した人の生きた声を聞いてほしいのです。本当の意味で、その辛さを理解することは出来なくても、何度も何度も耳を傾けてほしいのです。そして次は、私たち戦争を知らない世代が、その記録を、記憶を、込められた思いを引き継いでいく番なのではないでしょうか。

私たちは忘れません。いえ、忘れてはいけません。戦争を経験した人たちが、今もあの悲惨な記憶を忘れられないように、それ

を語り継ぐ私たちも忘れてはいけません。戦争の悲惨さを――

皆さんは知っていましたか。

68年前の終戦を目前に控えた8月14日・午前9時頃、私たちの故郷・鬼北町に4発の爆弾が落とされていたことを――

そして、二度と戦争という過ちを繰り返すまいと、今もそれを語り継いでいる人たちがいることを――



1 爆弾が落とされた河内神社裏山の頂上。消えた痕跡が68年という歳月の長さを感じさせたとき撮られた。2 満州に出征したときに撮られ、下大野の家族へと送られた写真。軍服を着て、誇らしげに写る写真の裏には、今も検疫の印が残されている